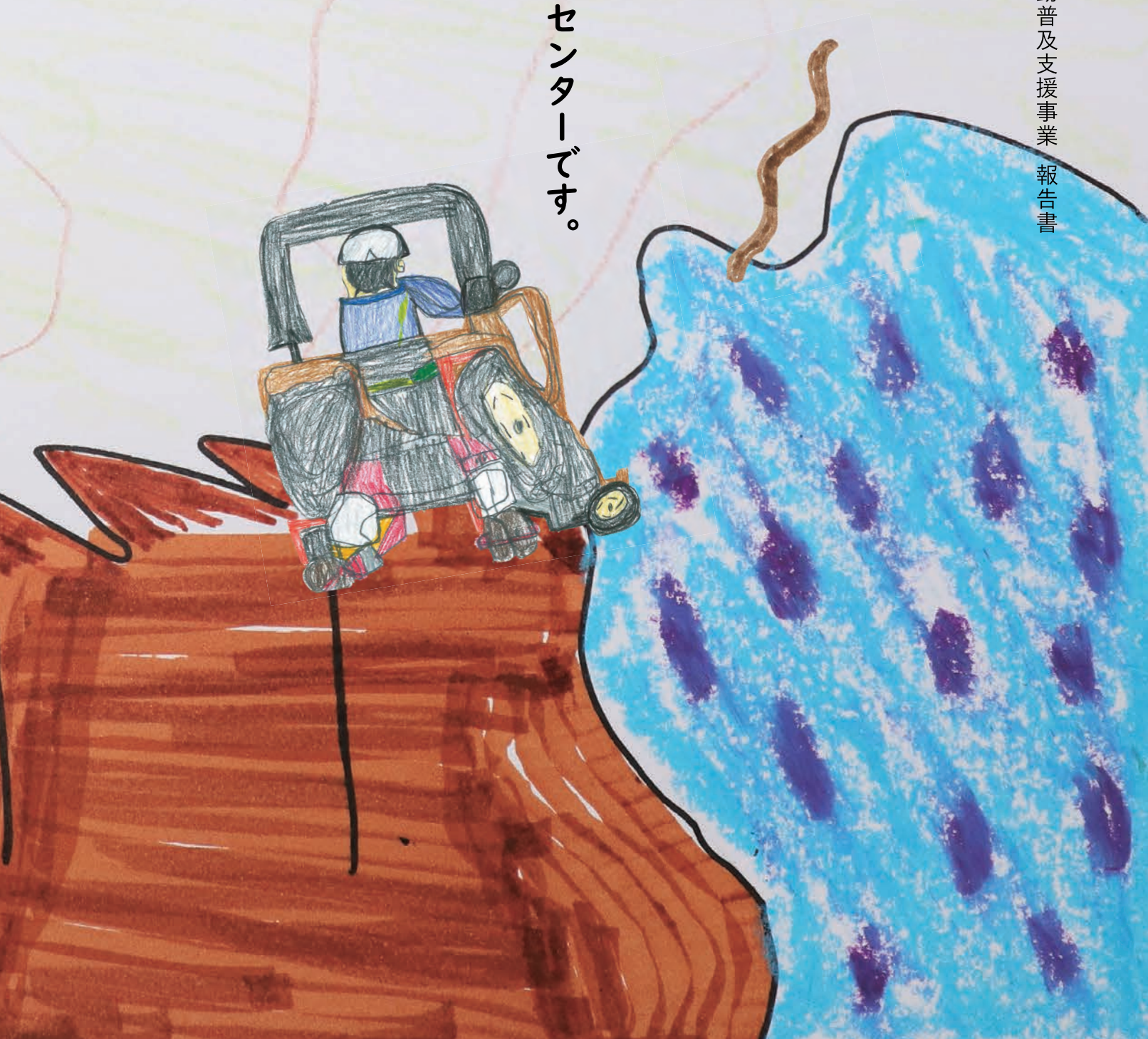
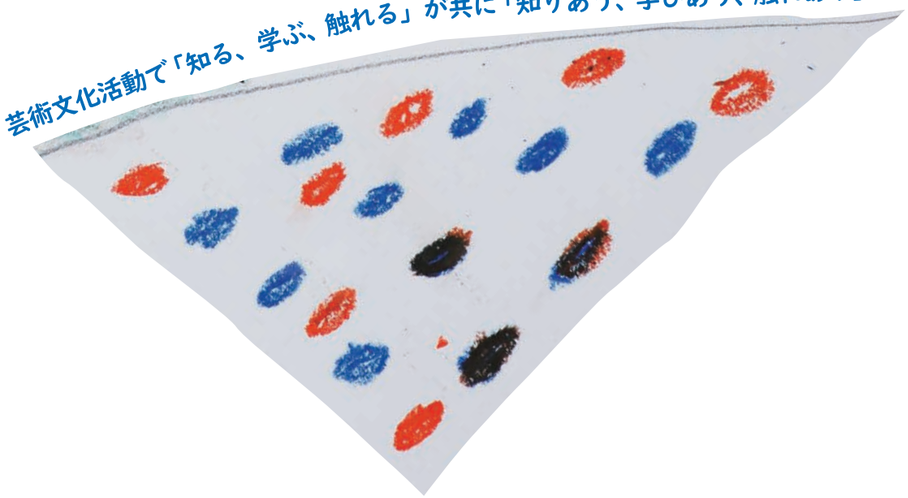
二〇一九年度　宮崎県障害者芸術文化活動普及支援事業　報告書

はじめまして、
宮崎県障がい者芸術文化支援センターです。



芸術文化活動で「知る、学ぶ、触れる」が共に「知りあう、学びあう、触れあう」へ



2019年度

宮崎県障害者芸術文化活動普及支援事業　報告書

はじめに

とある架け替え工事中の橋に、約10名のアーティストが絵を描きました。大きな魚が群れている全長260mにもなる大きな作品です。その橋には、撤去前にも作品が描かれ、架け替えた後にも描かれました。その橋では、ワークショップが開催され、約35組の親子が思い思いに魚を描き、多くの魚群でにぎやかでした。

しかし、その作品は、橋の工事や塗装と共に消えてなくなってしまいます。もうじき、その橋は開通し、何事もなかったかのように、日常へと溶け込みます。

それでも私たちはその橋の上を通るたびに、その魚たちを思い出し、語りあうでしょう。そこに作品は残っていなくても、作品への想いはつながっていきます。

日常生活が、何となく彩られ、何となくワクワクする、そんな気がします。

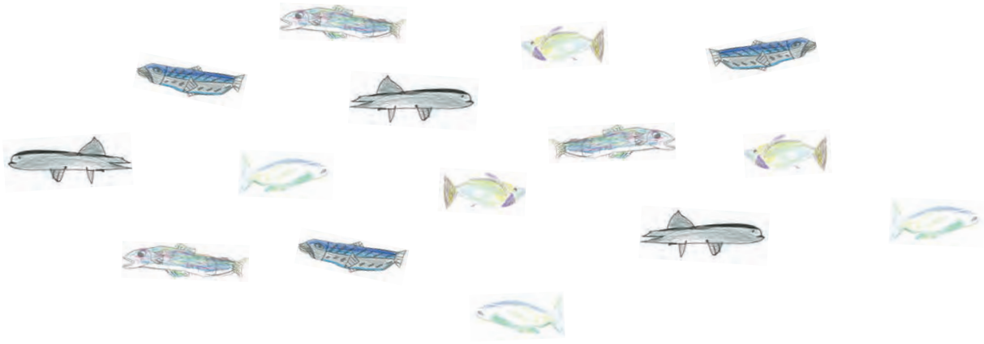
何かはっきりと一つの正解は言えませんが、芸術文化には何かあるのではないでしょうか。

そこには果てしない可能性が広がっていて、誰もが自由に泳げるのです。

芸術文化で彩られる社会、ワクワクする社会、つながり広がる社会。そのような社会が楽しみで仕方ありません。

2019年6月に開所し、まだまだ手探り状態で進めている支援センターですが、多くの方にご支援・ご協力いただき、今日を迎えることができました。これからも芸術文化の可能性、一人ひとりの可能性を広げていくことができるよう、活動し続けたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。
出会った作品の数々、皆様に感謝です。

2020年4月



もくじ

はじめに　2

もくじ　3

障害者芸術文化活動普及支援事業　とは　4

宮崎県障がい者芸術文化支援センター　とは　6

宮崎県障がい者芸術文化支援センターのねらいと活動内容　8

2019年度宮崎県障がい者芸術文化支援センターの取り組み

とりくむ前に　12

アンケートからみえてきた宮崎県の現状　14

”こころ”のふれあうフェスタ 2019 作品展　16

作品展レポート①　18

作品展レポート②　20

作品展クロージングイベント　21

作品展　アンケートから　22

ネットワークづくり　23

アート耕運機が耕しに来たぞ！ ワークショップ・セミナー・シンポジウム　24

ワークショップ　レポート　26

セミナー　レポート　28

ワークショップ作品展示　レポート　30

相談支援　レポート　32

2019年度の成果と課題　34

おわりに　36

障害者芸術文化活動普及支援事業　とは

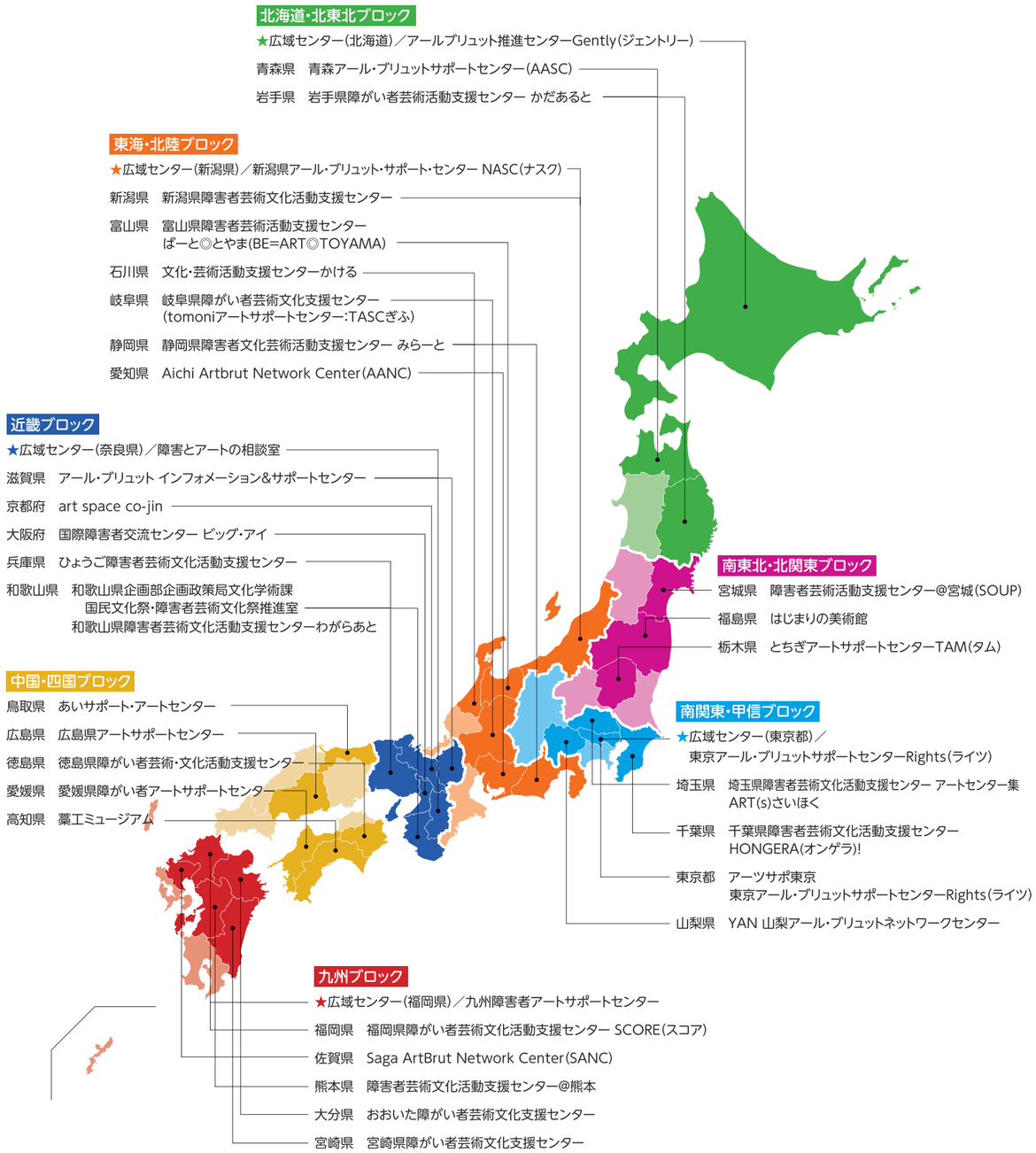
障がいのある人が芸術文化を享受し、多様な活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障がいのある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することをねらいとした事業です。

2014（平成26）年度から3年間を通じて全国12か所で行った「障害者の芸術活動支援モデル事業」の成果やノウハウをもとに、2017（平成29）年度から支援の対象を美術分野に加えて舞台芸術分野にも広げ、実施しています。

「都道府県」、「ブロック」、「全国」という3つの活動エリアを設け、令和元年度は全国32の都道府県において、36団体が事業を行っています。日本全国に支援の仕組みを整えると同時に、これらのセンターの連携・交流を進め、各都道府県での事業を、県境を越えて広域でもつなげ、地域での振興を図りながら全国規模で推進とネットワークづくりを行っています。

都道府県の「障害者芸術文化活動支援センター」は、芸術文化活動を行う障がい者本人やその家族、障がい福祉サービス事業所、文化施設、支援団体等をサポートする拠点として活動しています。

支援センター・広域センター　一覧



連携事務局　グロー（美術）、大阪障害者自立支援協会（舞台芸術）

※2019（令和元）年度は「南東北・北関東ブロック」「中国・四国ブロック」に広域センターが設置されていないため、連携事務局がこれらのブロックへの支援を行います。

詳しい情報はウェブサイトをご覧ください。
http://renkei-sgsm.net/

宮崎県障がい者芸術文化支援センター　とは

宮崎県障がい者芸術文化支援センターは、2019年6月に障がいのある人たちの芸術文化活動の振興を図るとともに、自立や社会参加を促進することを目的として開所いたしました。芸術活動を通して社会と関わり、それぞれの自立の形の創造を目指しているアートステーションどんこやを拠点としています。アートステーションどんこやは身体に障がいのある人々が集まって1994年に「障害者芸術村」という名称でスタートした団体です。当センターは、どんこや理念「障がいある人たちの視点から　表現することを通して誰もが集い　自分らしくあれる場を創造します　そして、地域社会の人たちと喜びを分かち合います」を大切にし活動しています。

宮崎県内の障がい者芸術を普及していき、障がいのある人の表現に芸術文化を活用します。その人らしくあれる環境を創り、その表現を通して周りの人や社会とつながり、地域の中で暮らしていくための工夫を生み出すことがねらいです。

芸術文化活動が
障がいのある人と
社会との接点となる
よう支援します

その人主体で
あることを
念頭に置き

一人ひとりの個性や
違いを自己表現と
して大事にします

芸術文化を通して
生まれる自信
（＝生きる力）や
可能性を見出します

宮崎県障がい者芸術文化支援センターのねらいと活動内容

宮崎県の地に障がい者芸術を普及していき、その人（障がいのある人）の表現に芸術文化活動を活用します。その人らしくあれる環境（社会）を創り、その表現を通して周りの人や社会とつながり、地域（社会）の中で暮らしていくための可能性（社会参加、自立、やりがい、生きがい、地域交流など）や生きる力（自信）を共に（co-）生み出すことがねらいです。

活動内容

相談支援

芸術文化活動のさまざまな疑問や不安にお応えします。

人材の育成

障がい者の芸術文化活動を支援する研修会を開催します。

関係者のネットワーク作り

活動を支える方や活動に関し知見を有する方とのつながりを作ります。

活動への参加機会の提供

作品展やワークショップを開催します。

情報収集・発信

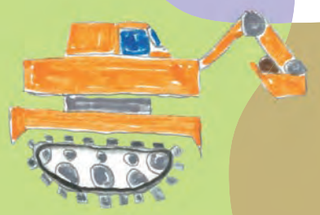
芸術文化活動に関する県内及び全国の情報を発信します。

国文祭・芸文祭みやざき大会との連携、協力

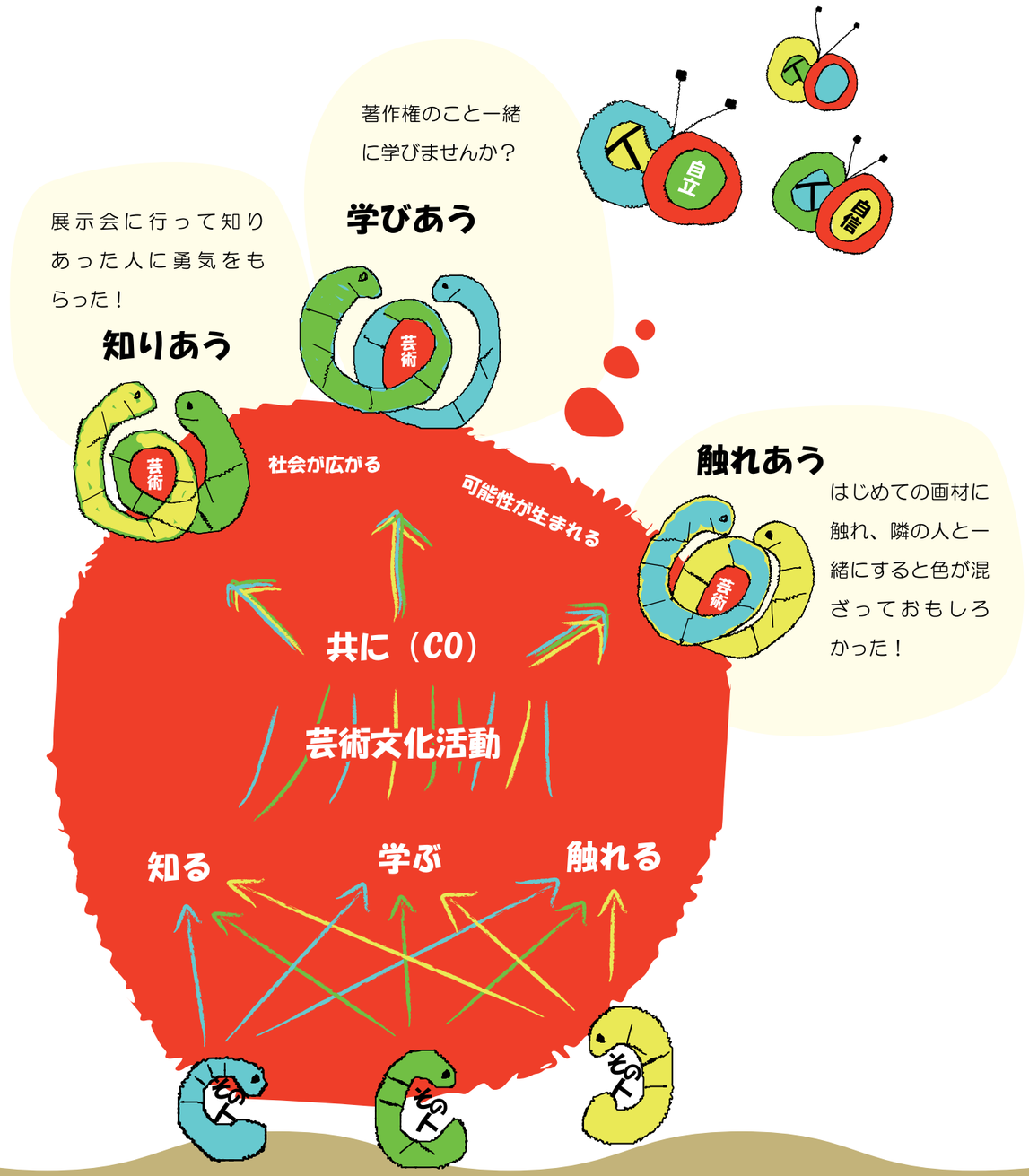
2020年国民文化祭・全国障害者芸術文化祭みやざき大会を応援します。

その他の芸術文化活動に対する協力

宮崎県における芸術文化活動を多方面で応援します。



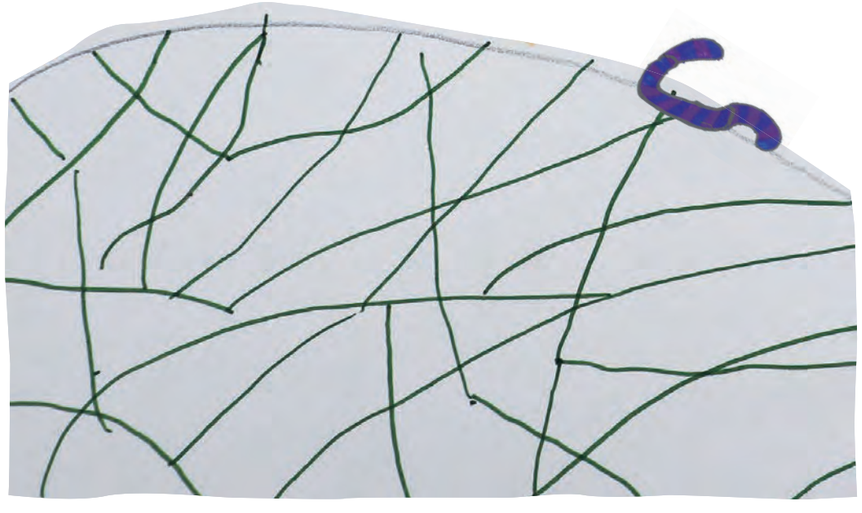
芸術文化活動で「知る、学ぶ、触れる」が共に「知りあう、学びあう、触れあう」へ



「co-」の意味は「共に」「共通の」「一緒に」という意味を持つ接頭辞です。
co（共に）＋operate（動く）＝cooperate（協力する）、
co（共に）＋worker（働く人）＝coworker（同僚）、　他にcoexist 、coeducateなどあります。

2019年度

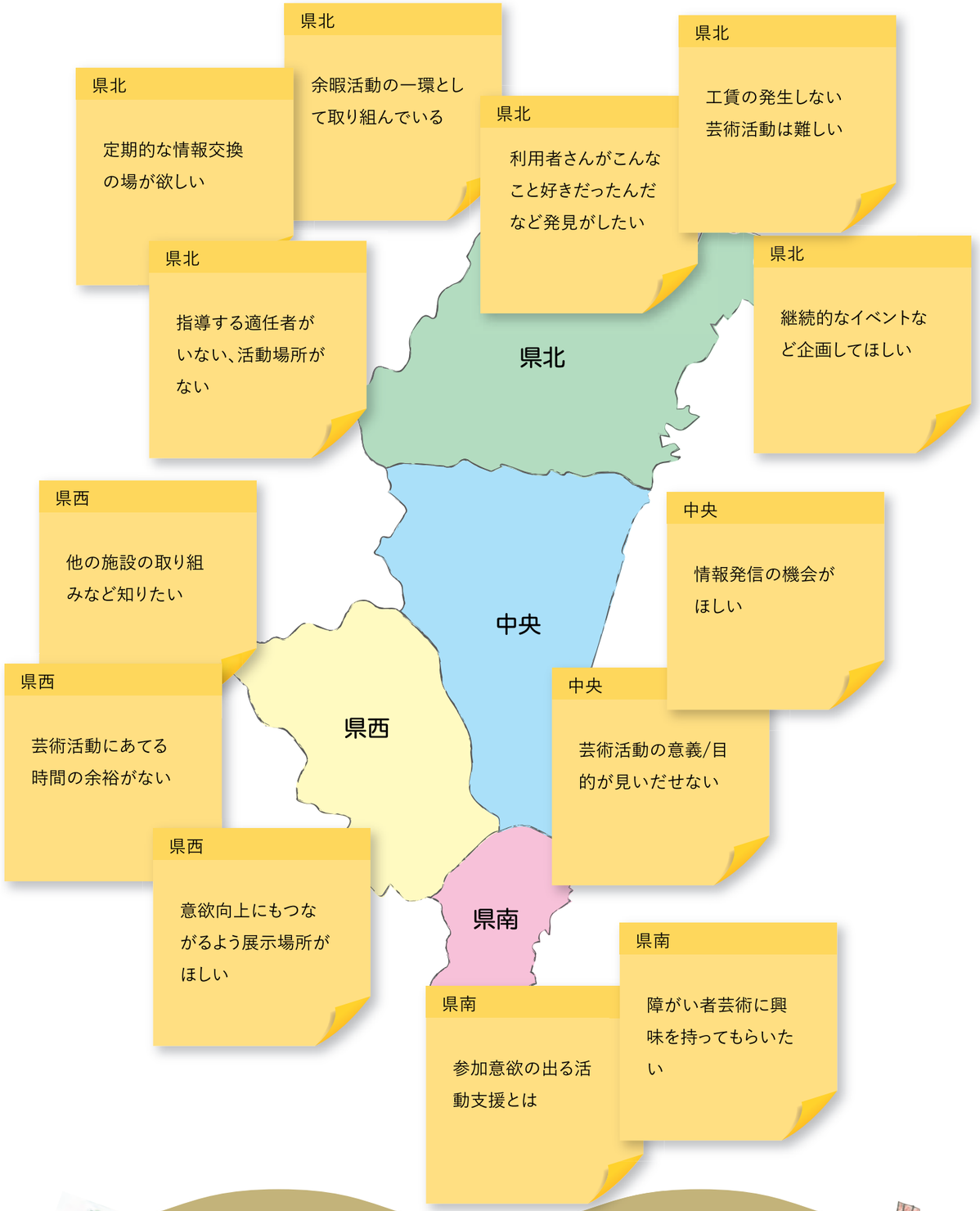
宮崎県障がい者芸術文化支援センターの取り組み

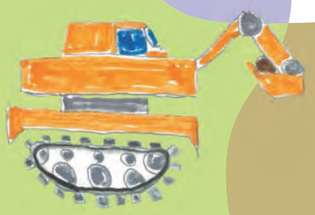


まずはじめに、宮崎県内にある障がい福祉サービス事業所に、芸術活動についての取り組み状況を把握するために今年度アンケート調査を行いました。

アンケートの結果、「芸術活動に関心がある」がほとんどで、課題や問題として「指導者・適任者がいない」、「活動場所がない」、「収入につながるのなら芸術活動をしてみたい・工賃につなげたい（商品化）」などの回答が多くありました。

全体を通して、芸術文化活動はごく一部の人の活動となっていることがわかりました。芸術とは分かる人には分かるものだとか、特別な教えを必要とし、鍛錬されたものであるといった、どこか敷居の高いものであるといった意識が事業所の中（支援者）にあると考えられます。





宮崎県の地理的な特徴にある縦長という点と公共交通機関があまり発達していないということから、県北、県西、県南と中央のおおまかな4ブロックに分けました。

アンケートからみえてきた
宮崎県の状況

↓

課題

2019年度

に取り組むことは

↓

きっかけづくりの1年

継続的な相談支援と宮崎県全体に呼びかけた作品展や芸術活動ワークショップを行う。芸術文化活動の魅力や可能性を知ってもらうきっかけを作る。

課題①

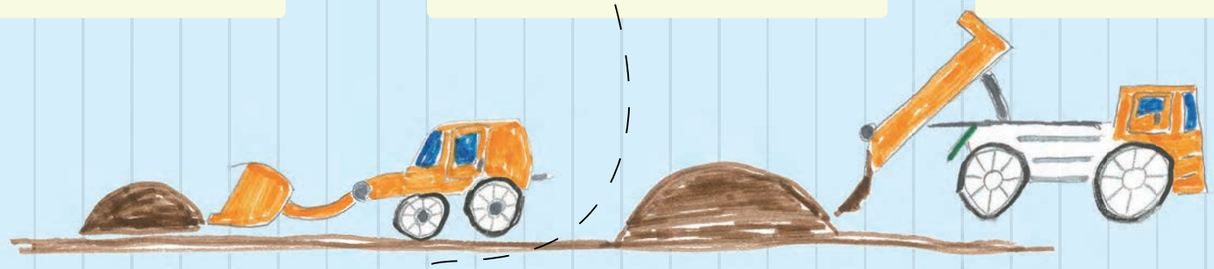
障がい者芸術文化活動が
もっと身近な活動となれる
環境をつくること

課題②

芸術文化活動を通して、障がいの
ある人もない人も共生できる
社会参加の場を多く提供すること

課題③

障がい者芸術文化活動の
魅力や可能性を知って
もらうこと



宮崎県全体における

芸術文化活動を掘り起こし障がい者芸術文化を根付かせたい

芸術文化活動を通して一人ひとりが知りあう、触れあう、学びあう

- 活動への参加機会の提供
- 関係者のネットワーク作り
- 情報収集・発信
- 人材の育成
- 相談支援
- 国文祭・芸文祭みやざき大会との連携、協力
- その他の芸術文化活動に対する協力

"こころ"のふれあうフェスタ 2019 作品展

（公募作品展/パネルディスカッション）

→ 発表の機会の創出となり、人とのつながりができる

アート耕運機が耕しに来たぞ！

（ワークショップ/セミナー/シンポジウム）

→ 芸術活動を身近に感じるイベントと可能性を考え、権利問題を学ぶ

"こころ"のふれあうフェスタ 2019 作品展

作品展の目標として、こころのふれあうフェスタとしての「テーマ性、プレイベント性、レガシー」を作り上げる。

「テーマ性」

・こころのふれあう作品展にする。

・障がい者芸術の様々な可能性を展示する。

→　芸術作品・アーティストとしての確立

→　商品デザインとしての社会参加の例の提示

→　シンポジウムの開催

「プレイベント性」

・2020年を想定した幅広いコンテンツを準備する。

・昨年度のプレイベントの継続性。

→　ワークショップの開催（昨年度の引き継ぎ及び発展）

「レガシー」

・センター企画として、宮崎オリジナルの障がい者アート展を創造する。

・障がい者アートに関わる人を拡大する。

活動への参加機会の提供

国文祭・芸文祭みやざき大会との連携、協力

その他の芸術文化活動に対する協力

情報収集・発信

人材の育成

"こころ"のふれあうフェスタ2019作品展

国文祭・芸文祭みやざき2020プレイベント

■ **2019年11月27日（水）～12月1日（日）**

■ **宮崎県立美術館　県民ギャラリー2**

発表の機会として、宮崎県内から平面から立体、書道、写真などの数多くの作品を展示した。

出展者数

障がいあり　障がいなし

190名 ＋ 8名

来場者数

936人

アートと障がい者支援についてのトークイベント

こころのふれあうフェスタ作品展クロージングイベント

■ **2019年12月1日（日）**

■ **宮崎県立美術館アトリエホール**

新聞社の外前田氏をコーディネーターに、造形作家の坂本氏、NPO法人の小林氏施設利用者の吉野氏の3名をパネリストにむかえ、それぞれの立場から表現や体験談を語ってもらった。

参加者数

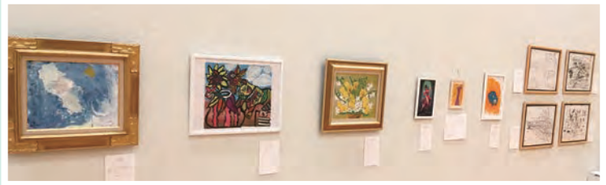
30人

活動への参加機会の提供　とは、

障がい福祉サービス事業所や、支援学校で芸術文化活動をされている方、またはご自宅で芸術文化活動をされている方などの情報提供を呼び掛け、県内在住のアーティストを幅広く発掘・調査し、活動をサポートします。

作品展レポート①

平面作品から立体作品198点が集まり、それら全部の作品をキャプションと共に会場に展示した。



支援学校の卒業生がいた!と会場の中でも出会い触れあいがあった。

テレビや新聞のニュース、友人のSNS投稿を見て作品展のことを知った人もいた。

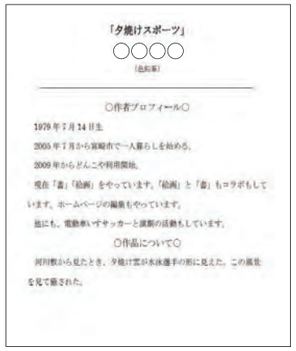
国文祭・芸文祭みやざき大会との連携、協力

とは、

「2020年全国障害者芸術・文化祭みやざき大会」のプレイベントとしての位置づけではあるが、2020年以降のことまで意識して、センター主催の作品展として、独自性を創造します。

作品展レポート②

発表の機会となる作品展を実施し、県内より多くの作品が集まりました。この作品展では、作品だけの展示ではなく、作者の想いや作品の背景をキャプションにつけ、来場者がより鑑賞を楽しめるような工夫をしました。また、展示する位置は車いすの人でも見やすい位置に展示し、鑑賞のしやすさも考慮しました。


「夕焼けスポーツ」
○○○○
（色鉛筆）

○作者プロフィール○

1979年7月14日生

2005年7月から宮崎市で一人暮らしを始める。

2009年からどんこや利用開始。

現在「書」「絵画」をやっています。「絵画」と「書」もコラボもしています。ホームページの編集もやっています。

他にも、電動車いすサッカーと演劇の活動もしています。

○作品について○

河川敷から見たとき、夕焼け雲が水泳選手の形に見えた。この風景を見て描きた。

キャプション

車いすの人でも見やすい位置を地面から135cmの高さに設定し並べたり、ぐるっと作品を上から見えるように配置した。

展示期間中は常駐スタッフを配置し、直接来場者と会話し質問に答え触れあいました。

また、障がい者芸術の商品化が社会参加となりえる一つの例として、デザイン会社よって商品化されたiPhoneケースの紹介を行いました。商品だけでなく、作者のプロフィールや商品化に対する当事者本人と支援員の想いも提示しました。

「家族も喜んでくれてうれしい！」
「新しい扉が開いたような感じ」（当事者より）

2人で試行錯誤しながらいろんな道具で絵を描いてみました。その時の絵がiPhoneケースになったので、とても思い入れがあり嬉しいです。（支援員より）

商品化されたiPhoneケースと原画やプロフィール紹介。

作品展　クロージングイベント（トークイベント）

作品展の最終日には、クロージングイベントとしてトークイベントを開催しました。アート活動と支援ということについて議論を深めるパネルディスカッションを行いました。登壇者は3名で、坂本金一氏、小林順一氏、吉野由夏氏です。坂本氏は、県内の複数の福祉事業所にて、絵画教室をされており、表現されたものからみえてくるその人らしさや想いについて語っていただきました。小林氏は自身のこれまでの活動の中から、精神障がいとカメラという芸術活動との結びつきおよび、支援について語っていただきました。吉野氏は、自身が身体障がい者ということで、芸術活動との出会いや、芸術活動がもたらす影響について自身の体験談を交えて語っていただきました。

パネルディスカッションの様子。

情報収集・発信とは、

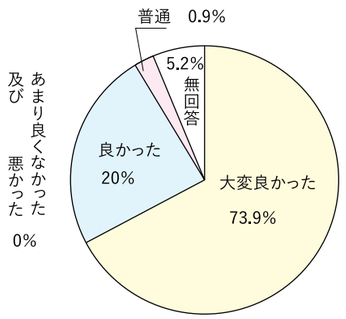
センターの主催するイベント、その他県内の公募展や展示会などの情報を、facebookやホームページにて発信します。県内アーティストの方の作品発表につながるようサポートします。

作品展　アンケートから

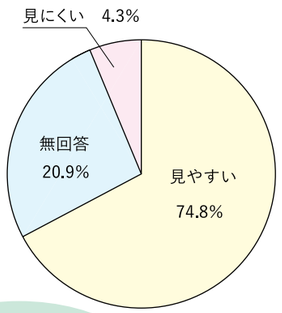
アンケート回収数
115枚

会場の出入口にアンケートBOXを用意しました。また、前年度までの国文祭・芸文祭のポスター、チラシ、報告書や映像を閲覧できるようにしました。

Q.本作品展（全体）はどうか？



Q.本作品展（見やすさ位置）はどうか？



テレビのニュースを見て、素晴らしいと思い来ました

素直で見ていて気持ちがいい

こういうフェスタを母国イタリアでもみたい（外国の方20代女性）

普段は運玉をつくっているから丸めるのが得意です。これ、僕が作った作品です！

こんな展覧会がもっと増えたら障がい者について理解が広がり、お互いに暮らしやすい社会になるのでは（30代女性）

自分も出したい（10代男性）

本人の顔が浮かぶようです、私も何か始めようと心動かされた（60代男性）

たまたま美術館が見えたのでバスを降りて入ってきました。本当に入ってきてよかった！「生きる」が伝わってきて感動した

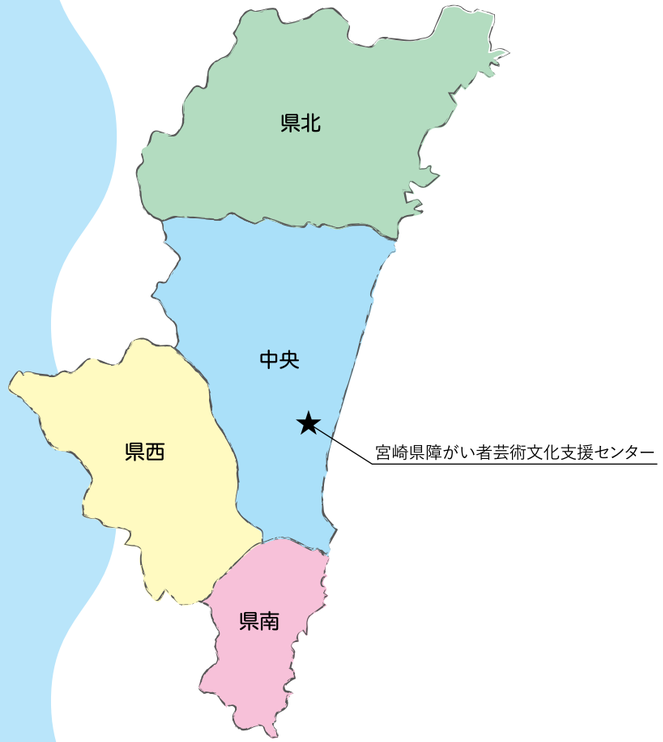
アンケート最後の質問：「あなたのこころの色は？」

空色、秋の空、白色、赤、青、濃い青、少しブルー、ピンク、明るいピンク、濃いピンク、むらさき、薄むらさき、赤っぽい薄むらさき、明るいグレー、もみじ色、穏やかな色、オレンジ、水色、山吹色、虹色（レインボー）、全部の色　などいろんな色がありました。

ネットワークづくり

宮崎県は県北、県央、県南、県西と物理的に距離があります。そこで各地区に拠点を作るため、事業所などに訪問調査し、組織体制を構築していっています。また、本県のみならず、他県の支援センターや広域センターなどとのネットワークづくりのため、県外出張や研修の場にも積極的に参加しました。

また、芸術活動に関わりがありうる美術関係や教育関係、弁護士関係の専門的な組織との協力体制の整備を行いました。



関係者のネットワーク作りとは、

県内の芸術文化活動を行っている団体と連携を図ります。その他にも教育・美術関係や、弁護士などの専門機関、県や市との協力体制を整え、充実した芸術文化活動を行えるようサポートします。

ワークショップ・セミナー・シンポジウム

アート耕運機が耕しに来たぞ！

情報収集・発信

相談支援

関係者のネットワーク作り

人材の育成

活動への参加機会の提供

芸術文化活動の魅力やおもしろさ、可能性を障がいのあるなしに関わらず、多くの人に知ってもらう。

・宮崎県内3か所でワークショップ・セミナー・シンポジウムを行い、芸術活動を掘り起こして地域に芸術文化活動が根差すことをねらう

→　芸術文化活動に触れる機会の提供をする

→　障がい者アーティストの発掘

→　宮崎、地域らしさをみつける

→　当事者参加型の芸術ワークショップを開催する

→　ワークショップおよびセミナーを連動する

→　シンポジウム（著作権に関する）へと導く

→　当事者本人という大事な視点を忘れないようにする

アート耕運機が耕しに来たぞ！ワークショップ

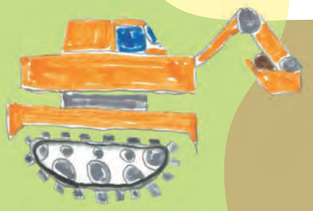
@えびの　@ひゅうが　@みやざき

■ 対象：障がいのある人

■ 講師：松下太紀氏（造形作家）

アート耕運機ということで、アート活動を地域に掘り起こす、根付かせる、つなげるというキーワードで、根、土、種子、花を想像させる活動を平面と立体で表現してみる。宮崎県の西部えびの市、中北部の日向市、中央の宮崎市でワークショップを3回行う。

2020 2/5（水）	2020 2/12（水）	2020 2/14（金）
えびの市文化センター	日向市障がい者センター あいとぴあ	宮崎市青少年プラザ
障がいあり 2名 ＋ 障がいなし 5名	障がいあり 8名 ＋ 障がいなし 4名	障がいあり 8名 ＋ 障がいなし 5名



アート耕運機が耕しに来たぞ！セミナー

■ 2020年2月24日（月）

■ アートステーションどんこや

■ 対象：障がいのある人、支援者および興味関心のある人

■ 講師：高峰由美氏（株式会社ブルーバニーカンパニー代表）

講師：富村博光氏（アートステーションどんこや施設長）

前半は、障がい者アートで商品化のプロジェクトを行なっている（Jumping　Art　Project）ブルバニーカンパニー代表の高峰由美氏と、当事者と向き合いながら社会との接点を目指すアートステーションどんこやの施設長富村博光氏の講話を聴いた。

後半は、障がい者芸術の魅力や可能性について話し合うグループワークと発表を行った。

参加者数

障がいあり 6名 ＋ 障がいなし 10名

アート耕運機が耕しに来たぞ！シンポジウム（コロナウィルス影響のため中止）

↓

アート耕運機が耕しに来たぞ！ワークショップ作品展示

■ 2020年3月11日（水）～31日（火）

■ ソーシャルインクルージョン・ラボ 未来基地（いつかベース）

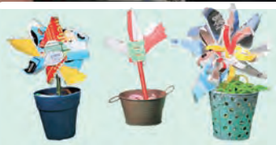
ワークショップやセミナーを通して芸術文化活動に触れ、表現されるものの魅力や可能性の発展をシンポジウムへとつなげる予定だったが、コロナウイルスの影響で中止となった。そこで、アーツカウンシルみやざきの協力のもと、ワークショップ時の作品展示を行った。場所は、ソーシャルインクルージョンをとなえ拠点を構えている「いつかベース」で、宮崎市中心部の県庁近くにある。外を歩いている人が気軽に鑑賞できるように窓枠に棚を設置して展示を行った。

人材の育成　とは、

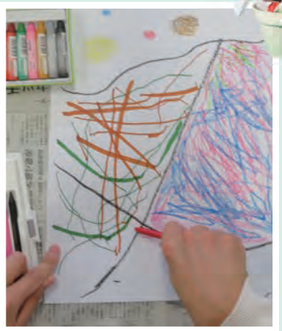
県内各地で当事者向けのワークショップを開催します。また支援者を対象に、芸術文化活動の様子やサポートについての見学会を実施し、年間を通して学べる環境を作ります。その中で見えてくる様々な課題についての研修会なども定期的に行います。

ワークショップ　レポート

手に入りやすい画材や空き箱、割り箸などの身近なもので芸術活動をしました。まずは芸術活動に触れてもらい、「たのしい」「おもしろい」「むずかしい」などの発見といった、完成度を求めない芸術活動を通して得られる喜びや失敗などを体験してもらいました。



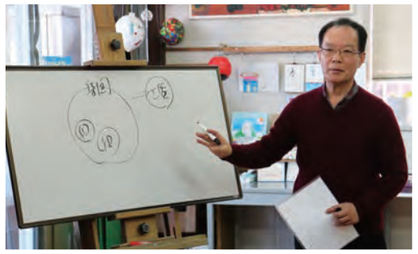
手に入りやすい画材としてクーピー、クレヨン、水彩ペン、色えんぴつと画用紙を使った。根付かせる、つなげるというキーワードで、根、土、種子、花を4種の画材を使って描きました。色を塗るだけではなく、色を重ねて混色するとどうなるのかなど体験してもらった。



植木鉢に根っこ、土、茎、花を創作していった。粘土を丸めたり、毛糸を切って丸めたりなどの触感を楽しみ、お菓子の空き箱をちぎって、隣の人と交換し、ボンドで花を形作りった。割り箸の茎に色を塗って、ボンドで花とくっつけた。2色の毛糸をからませ丸めることでつながることを楽しんだ。

当事者、支援員からも楽しかったという意見が出た。このような身近なもので芸術活動ができるんだという発見と参考にしたいという支援員の声があった。

障がい者アートで商品化のプロジェクトを行なっているブルーバニーカンパニーの取り組みはJumping Art Projectとして展開しています。アート活動（作品）をどう社会と結びつけるのか、企業と障がい者アートをつなぐことを仕組化する事業に取り組まれています。



アートステーションどんこやは、当事者主体であることを念頭に置き活動しています。芸術文化活動が社会との接点となり、それが経済的支援やその人の生きる力（自信）につながるよう支援しています。

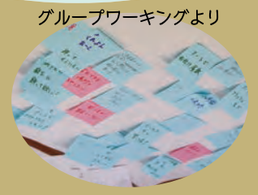
参加者は当事者（メンバー）、福祉施設スタッフ、デザイナー、写真家、相談員、ファブラボの方、保育士、家族の方、など様々な人が集まる。それぞれの立場から考える芸術文化活動を可視化し、共有できた時間となった。

セミナーを通して共有したこと

- **創作は一人一人の表現を大事にする。**
- **芸術活動の過程にもその人の個性が表れている。**
- **芸術活動を通して、自らの可能性を知ることができ、社会との接点ができ、世界観が広がる。**

グループワークでは、障がい者芸術の魅力や可能性を参加者それぞれが付箋に書いて貼り話し合いました。アイデアを可視化し、たくさんのアイデアの中から一つを考え深め、想いを共有しました。グループごとに障がいのあるなし関係なく学びあいました。

グループワーキングより



・自分たちを知ってほしい・気軽にアートや想いを話せる場がほしい・アトリエ欲しい・飾ってもらいたい・SNSの発信が難しいなー・感情や愛情をアートでアウトプットしたい・事業所オリジナルLINEスタンプ作りたい・お金欲しい・商品化のコツ・展示できる場所を増やしたい・アートなフラッシュモブ・企業にアピールするには・横のつながりを作るには・行政を巻き込む・絵を通してコミュニケーション・作品を広めたい・楽しくありたい　など

ワークショップ作品展示　レポート

※シンポジウム中止のため

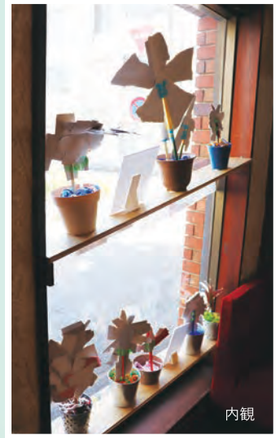
ワークショップ・セミナーを通して芸術文化活動に触れあい、表現されるものの魅力や可能性の発展を考えました。その流れを踏まえ、当初シンポジウムでは、そこに伴う「著作権」ということを学ぶ機会を企画しました。学ぶ一歩目ということで、「たんぽぽの家」にて開発された「知財でポン！」という学習カードゲームを使い、体感的に感じることができるよう準備しました。その時の会場で、ワークショップ作品とセミナーを通して考えたことを展示し、連続性のあるものにする予定でした。しかしコロナウイルスの影響で中止となりました。そこで、それらワークショップ作品を宮崎市中心部のソーシャルインクルージョン・ラボ未来基地いつかベースにて展示しました。室内に入らずとも外から鑑賞できるように、窓枠に棚を作り作品を配置し、通行人に広く発信しました。また、同じ時期の別のワークショップ作品と一緒に展示されることで、芸術文化活動を通して触れ合いつながりができました。

ワークショップ参加者メンバーが展示棚台座の色塗りをしている様子。

未来基地いつかベースでは、障がいがある人はもちろん、どんな方でも立ち寄ることができ、使うことができるスペースである。

どんな状況でも、芸術文化活動を発信し続けることが障がいのある人もない人も同じく課題であり、チャレンジすることだと、この展示を通して学びあいました。

窓の外から、歩いている人が中に展示されている作品を見るユニークな展示方法をとった。通りすがりに外から作品を鑑賞することができ、時間帯によって、窓枠に反射する光で作品が違う表情が見れる。



内観

Connect chairs for Inclusion ～龍をつなぐワークショップ～より

相談支援　レポート

電話による相談が主で、当事者、当事者の家族、報道関係者、イベント企画者、行政から受け付けました。内容としては、「作品発表の場はないか」「障がいの者の芸術作品を展示したい」「作家を紹介してほしい」「自宅にて芸術活動をしているため、何かできないか」などがありました。相談を受けた後に、情報を提供したり、現地に行き調査を行ったりしました。内容によっては、継続的な支援を行っております。

相談件数

15件

主な相談案件

作品を見てほしい！

当事者の保護者からの相談

ケース01

自宅にて芸術活動をされており、他とのつながりはほとんどない状況であったため、自宅に訪問し、作品を拝見しました。加えて、本人及び家族の想いを聞き、発表の機会を提案し、発表の場へとつなぎました。芸術的つながりのみならず、福祉的なつながりへの支援も同時に行いました。

アーティストを紹介してほしい！

イベント企画会社からの相談

ケース02

イベントにて、障がい者芸術の作品を展示したいとの相談がありました。展示に関する状況を確認し、作品の取り扱いに関する助言をするとともに、作家への確認をとったのちに、作家の紹介および、仲介を行いました。

作品を発表し方い！

当事者本人からの相談

ケース03

作品展の情報を知りたいとのことであったため、県内外の作品展を問わずに情報を提供しました。作品展の情報を提供するのみならず、出展に関する手続等の相談にも適宜対応しました。

相談支援と同時に情報の収集発信を行いました。県内の障がい者芸術に関するイベントや「2020年全国障害者芸術・文化祭みやざき大会」に関する情報を収集し、Facebook等のSNSでも情報発信をしました。また県外のイベントやセミナー等の資料を収集し、配布を行いました。相談支援や訪問調査、イベント参加者等からアーティスト情報を集め、メール等で直接的な情報発信をしました。

相談支援とは、

芸術文化に関して、支援方法、作品の権利についてなど、様々なご相談に対応します。支援員からの情報提供だけではなく、外部の専門機関へのご紹介なども行います。ご本人やそのご家族、事業所など、どなたでもご相談いただけます。

2019年度の成果と課題

その人その人が芸術文化活動を通して知りあい、そこでもたらされる気づきや発見をお互いに学びあい、想いを共有できた。芸術文化活動を通して、人と人、人と芸術文化、芸術文化と芸術文化が触れあうきっかけづくりができた1年目となった。

「知る・学ぶ・触れる」から
「知りあう・学びあう・触れあう」となる成果

- 作品展
- ワークショップ（県北・県西・中央3か所）
- 交流の場となるセミナー
- 商品化を考えるセミナー
- 障がい者芸術に関する相談への対応
- 美術館、支援学校、弁護士などとのネットワークづくり
- 文化活動に強いアーツカウンシルみやざきとの連携
- アーティストの調査・発掘
- 芸術文化活動を実際している人の話を聞くトークイベント

- 地域の人とつながった
- 実際に商品になり広まった
- 電話での問い合わせが増えた
- 障がい者芸術文化活動の抱える問題を共有した
- 商品化についてもっと知りたいという意見が出た
- キャプションを通して作者と向かい合ったようだという声が聞けた
- 芸術文化活動の支援者が増えた

- 次の展覧会に応募したい！という声を聞いた
- いつもと違う（当事者の）発見があった
  ー支援員より
- 障がいや職種を越えた人たちが同じテーマで学びあった
- テレビ・新聞などで取り上げられ広まった

センターの存在、役割の周知がまだまだ浅い

課題① **「見せる」の強化**
（何を、どこで、誰に、どのように）

課題② **周知・工法の工夫**

興味関心を次の段階へつなぎきれていない

課題① **想いをしっかり聞く**

課題② **芸術文化活動に関する場や情報を提供し続ける**

課題③ **芸術文化活動できる環境整備の支援**
その人らしさ〉事業所らしさ〉地域らしさ〉宮崎らしさ

学ぶ場面や機会が少ない

課題① **学びたいこと、疑問や不安の調査**

課題② **学ぶ意欲が高まるような企画づくり**

課題③ **芸術文化活動に関する問題（著作権や知的財産権）を学びあう**

定期的な場づくりが必要

課題① **魅力的なワークショップやセミナーの開催**

課題② **周知・告知の始まりから途中経過や結果までの報告**

課題③ **誰もが気軽に参加し、想いを伝えあえる場づくりを継続する**

宮崎県の地理的状況によるつながりの弱さ

課題① **時間差のないSNSでの情報発信・共有の強化**

課題② **各ブロック（県北、県西、県南）に協力体制をつくる**

課題③ **各ブロックでの参加しやすい場所の発掘**

芸術文化活動に関することを、一人ひとりが学ぶのみならず、お互いに学びあう場面が見られました。障がいのあるなし関係なく同じテーブルに集まり、一つのテーマについて一緒に考えました。お互いに寄り添いながら共に伝え合いました。代弁しようとしたりせずじっくり待って聞き、想いや考えをすり合わせていく姿は、まさに小さな共生社会であり、芸術文化がつないだものだと考えられます。当センターはこれからも、その人その人が芸術文化活動を通してその人らしくあれるような支援をしていきます。障がいのある人もない人も共に芸術文化活動をし合えば、お互いの社会が広がり可能性も生まれ、幸せな世界につながるのではないでしょうか。

おわりに

手探りのなか、宮崎では障がい者芸術文化活動の現状把握を行うことから始まった。

宮崎の現状として、障がい者アートには興味はあるがその活動をどのように始めたらいいか、工賃を稼げることができるのかなど、これらアンケートの回答では、事業所としての意見が多くあった。当事者へアンケートのことが届いたのか、少しでも意見が聞きたかった。

一方、2020年に「国文祭・芸文祭みやざき大会」が行われることを視野にスタートしたセンターは、芸文祭本番を前に”こころ”のふれあうフェスタ」作品展の運営を担うことも課題として提起された。

この作品展で大切にしたことが、作品を通して、作者の「人となり」や作品への「想い」をキャプションに含め、観覧者へ伝えることであった。そこで、在宅生活のアーティストをはじめ、事業所等への作品募集を行った。だが、作者本人の想いというより、その多くが事業所によりキャプションの内容が作成されていた。

芸術活動は、自己表現活動。障がいのある人が自らの意思を伝える、表現するといった当たり前のことが自らの障がいによるところでない面で、意外に軽視されていると感じる。

芸術活動をとおして、作品づくりだけにフォーカスするのではなく、彼らが「伝えたいこと」、「やりたいこと」、「感じたこと」などを一緒にフォーカスできればと思う。そして、互いに少しでも豊かさを感じられる生き方になれるといいなあと思う。

これは、芸術活動に触れたからこそ、見出せたのかもしれない。

最後に、手探りのなかで、障がいのある人一人ひとりに向き合い、全県的な作品展などでは経験のない新たな分野にチャレンジし、確実に成長を遂げているスタッフ、そして彼らにやさしく手を差し伸べていただいた新たな仲間たちに感謝申し上げます。

はじめまして、宮崎県障がい者芸術文化支援センターです。
2019年度 宮崎県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

企画・編集・発行　宮崎県障がい者芸術文化支援センター
（社会福祉法人ゆくり アートステーションどんこや）

〒880-0825　宮崎県宮崎市東大宮4丁目23−1
TEL　0985-27-2823
FAX　0985-89-6000
E-mail　donkoya@jl.moo.jp
URL　http://donkoya.moo.jp

協力　アーツカウンシルみやざき

構成・執筆・デザイン　愛甲 貴大　岩切 明日香

表紙画・本文挿入画　アートステーションどんこやのメンバー

宮崎県障がい者芸術文化支援センター